

デイ家の人々との付き合いは、1981年のケインブリッジから始まる。

英国文化振興会 (British Council) の奨学生としてわたしが1980年に留学したときに、大学はケインブリッジを志望したが、学寮の選択は一任した。というのは、妻子と一緒に計4名の家族で住むことのできる施設を備えた学寮は限定されていたから。ケインブリッジの街の北西、緑にかこまれたチャーチル学寮に家族もち院生のフラットがあり、結局、そのメゾネット形式の部屋に2年間お世話になることになった。コの字型の3階建てで、子どももちは1・2階のメゾネット、夫婦だけの場合は3階のフラットに入居した。多くは外国から来た院生家族からなるコロニーがここに現出して、中庭にはいつも小さな子が遊び、住民はなにかと行き来していた。

無事進級が決まり、留学2年目が始まろうという81年9月の末に、メゾネットの並びの部屋のドアにオーストラリア国旗が貼られた。オーストラリアの政治か国際関係か、コモンウェルス批判みたいなことをやろうというダイヴィッド・ダイと、妻シルヴィア、息子マイクルが到来したのだ。記憶は曖昧だが、最初は洗濯機の使い方か、コンセントの違いのことを話題にしたと思う。メルボルンの大学院から奨学金をえて、ケインブリッジの博士課程に入学したのだった。なにしろ、わが息子も小学校で級友の「カインブリッジ」訛りの「アイビーシー」を習得してくるような環境だから、はた目にはダイヴィッドの強いコクニ訛りは、まったく問題ないように思われた。しかし、当人にとっては、訛りでなくイングランド人の発想・世界観こそが癪のたねだったようで、「俺の指導教授は、オーストラリアの初代首相の名さえ知らない」と言い捨てることもあった[わたしもその名を知らないので(!)、いささか落ち着かない会話であった]。

イングランドの18世紀地域史をやっていたわたしと20世紀のコモンウェルスを扱うダイヴィッドが学問的に立ち入った話をするよりは、妻同士が親しくなって家族の交際が始まった、という方が実態に即している。チャールズ・ダイアナの結婚式、フォークランド戦争、そしてIRAテロの激化し始めたころであった。その後、わたしたちは帰国し、ダイヴィッドはクレア学寮のフェローになり、妻同士はそれぞれ子どもが増えて多忙をきわめ、ということで、1985年に再会したが、そのあと連絡がとだえてしまった。オーストラリア史のテレビ番組制作にもかかわっていたようだ。

次の再会は偶然の恵みによる。1995年にロンドン大学の客員でいたころ、毎日読むわけでもない新聞をその朝はなぜか『タイムズ』紙を選んで買ってきた。投書欄を開くとダイヴィッド・デイというダブリンのUC大学教授が保守党の出入国管理政策について批判していた。保守党寄りとされる『タイムズ』紙にしてはトップの扱いで、この件について社として世論を喚起しようとしているかと思われた。保守党のEU・外国人政策にも関心はないではなかったが、それよりこのデイ教授が、あのダイヴィッド・ダイなのかどうかを確かめる方が先決だった。ダブリンのUC、史学科に電話したところ、繋いでくれなかった。『タイムズ』紙の投書にたいして電話やファクスが殺到し、応答謝絶ということらしい。しかたない、ケインブリッジのコンドーだ、連絡がほしいと秘書にこと

づけて返事を待つことにした。

その日のうちにダイヴィドが折り返し電話してきて、話はとんとん拍子に進み、翌月クリスマス休暇にロンドンに来る妻と一緒にダブリンを訪問することになった。真冬のダブリンは雨で暗かったが、ダイ家は計5人でにぎやかに広い家に住んでいた。UCは19世紀にできたカトリック大学で、同僚たちはほとんどカトリック。ところが、ダイ家の祖先はアイルランド共和国のプロテスタント飛び地からオーストラリアに移民した、といった事実まで調べられていて、無信心な一家としても、いささか落ち着かない環境なのだった。息子マイクルはたくましく育ちコンピュータ関係の専門職をめざし、双子の娘はまだ可愛いさかり、といったダイ邸に滞在して、楽しく過ごした。

その次にまたもや驚かされたのは1998年で、駒場の木畑さんがオーストラリア史教授としてデイを1年間招聘するのだがお知り合いか、と尋ねてきた。この1998-9年は当方がむやみに忙しくてあまりお付き合いできなかったが、代わりに（わたし以外の）両家族が夏ににぎやかに北海道を旅行した。

……そして、この2006-7年である。今回は本郷でもセミナーをやってもらい、『クリオ』に寄稿していただくことができた。その他、日本の関連分野の研究者との交流・共同研究も進んでいるようで、オーストラリア史だけでなく、コロニーやディアスポラにもかかわる、世界史のより広い場面での活躍が期待される。



1985年ケインブリッジにて、デイ家の人々